Japanese Association for Religious Studies

の四つの基本的規格を満たしている。一、トラウマのリスクと回復に関する研究成果に合致する。二、災害現場得の適応が可能で、実用性がある。三、生涯発達の各段階に適切である。四、文化的な配慮がなされており、柔軟に用いることができる。

ＰＦＡでは、被災者すべてが重い精神的問題を抱え、長く苦しみ続けるとは考えない。被災者やその影響を受ける人々が苦しむのは、広範囲にわたる初期反応（身体的、心理的、行動上、スピリチュアルな問題）であり、その中で強い苦痛を引き起こすものが、時に適応的な対処行動を妨げる原因となる。そのため、共感と気づかいに満ちた災害救援者からの支援は、初期反応の苦しみを和らげ、被災者の回復をたすける。ＰＦＡは、そのためのガイドラインである。

ＰＦＡの第二章「安全と安心感」において、悲嘆と信仰の問題（Attend to Grief and Spiritual Issues）が取り上げられ、宗教が提供する儀礼の重要性が説かれている。数珠、仏壇、聖書などの宗教用品は安全感と自己コントロール感を向上させる。その人にあった祈りの場が確保されることが望ましい。奇跡を信じる人もいるが、それは現実感の喪失ではなく、圧倒的状況を生き延びるためのその人なりの方法だと解釈する。多くの人は、そうした宗教的な観念や儀式に助けられて大切な人の死を乗り越えていく。

これは、宗教が死別者に提供する儀礼が自然回復力を促進する精神的なセーフティネットとして高く評価されていることを意味する。そして、このネットから漏れた人に対して医療や精神保健からの専門的援助が受けられるように連携することによって、援助資源の枯渇を防ぐことが可能となる。

ＰＦＡにおいて、このように宗教の役割が高く認められている理由としては、チャプレンと呼ばれるトレーニングを受けた聖職者たちがその作成過程に加わっていることが挙げられる。

法華山一乗寺巡礼札からみる西国巡礼者の出身地域について

幡鎌　一弘

西国三十三所第二十六番札所の法華山一乗寺（兵庫県加西市）には、大量の巡礼札が残されており、かねてより注目されていた。現在、二〇〇〇年以後の本堂の解体修理工事にともなう巡礼札の悉皆調査（加西市・科研費の補助）の最後の整理にあたっている。

悉皆調査の概要については、稲城信子編『兵庫県加西市・一乗寺の歴史資料（巡礼札）の調査とデータベース化』元興寺文化財研究所、二〇〇九年）や、幡鎌「巡礼札からみる西国巡礼の信仰形態―天井に打ちつけられた信仰心―」（『天理大学おやさと研究所年報』一六号、二〇一〇年）によって示した。その数が、約二万八千点（ただし、若干の他の奉納物を含む）に及ぶこと、奉納物の多様性、打ちつけられた札の流動性ないし時間的な偏差などが明らかになった。現在、一点ごとのデータベースを作成中であり、従来とは異なった見方が可能になってきている。

十七世紀の札は、微妙に形が異なるが、十八世紀に巡礼指南書の類が数多く出版されて、いっそう平準化されていく。しかし、指南書に従わない地域があり、巡礼の母体となる地域組織

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

（観音講など）が存在して巡礼の様式を規定していたことがうかがえる。

地域については、国を単位で検討するのが、従来の方針であった。しかし、必ずしも生活と密着しない国単位での把握には限界があり、より細かく検討することで、地域の特殊性について明らかになると思われる。すでに、肥前国については、ほぼ長崎に限定されるため、独自に取り上げられてきていた。また、山城国については、西岡と呼ばれる京都市西郊が非常に多いことも注目されていた。両地域とも、指南書とは異なった形態（絵馬型）の札を数多く納めており、衰退したとはいえ、西岡では、現在も観音講が続いている。

伊勢国については、四日市・桑名などの商人が多く、金泥・銀泥で文字が書かれた大判で特殊な漆塗りの札を奉納していた。札の残存に関しては、地域格差とともに経済格差もあることが推定されよう。つまり、丈夫で立派な巡礼札であるがゆえに、廃棄されずに残ったのである。このことは、紙と木という材質の違いについても注意を促す。いうまでもなく、紙札は極めて残りにくく、また十九世紀には、同じ紙でできている千社札との重なりを視野に入れ、関東からの巡礼者数の減少を検討することが必要になろう。

最も巡礼札が多いのは武蔵国であることはすでに指摘されており、今回サンプリングとして、天井分の巡礼札約二五〇か所（約二二〇〇枚）から武蔵・下総・常陸・下野などを抽出してみた。すると、武蔵・下総については中仙道と利根川・江戸川の間の地域、とくに日光街道沿いに集中していることが分かる。これらは、武蔵国葛飾郡・埼玉郡・足立郡、下総国葛飾郡で、関宿・菖蒲・羽生・忍・幸手・騎西・庄内・八条などの領でまとめられる地域にもあたっている。利根川上流では、熊谷より西側に及ぶことがなく、江戸の住人の札も今回のサンプルの中からは見出すことはできなかった。寛永期に江戸小網町から奉納されている札や《落書》も確認されているから、江戸の住人が西国巡礼しなかったわけではない。このように考えると、巡礼札が残るということは、かなり特殊であり、巡礼札から巡礼を検討するには、いろいろな制約があることになる。

しかし、一乗寺の巡礼札によって、地域に残っていない巡礼の事実を明らかにでき、また、巡礼者の足跡をたどるきっかけにもなる。一乗寺の巡礼札から巡礼者データベースを作成して利用できるようにするのが当面の課題である。（この報告は、科学研究費補助金基盤研究（C）「西国巡礼者に関する基礎的データの整理と検討―一乗寺巡礼札のデータベース化―」（研究代表者・幡鎌一弘）の成果の一部である。）

江戸時代前期の遍路道再現
――澄禅『四国辺路日記』を中心に――

柴谷　宗叔

江戸時代前期に四国遍路をした澄禅（一六一三―八〇）の『四国辺路日記』（一六五三）に基づき、当時の遍路道を探った。現在の徒歩遍路道と重なる部分も多いが、全く異なる場所もある。江戸時代の遍路道は四国各県の教育委員会などの調査で再現が試みられているが、真念（？―一六九二）の『四国邊路道

NII-Electronic Library Service